楽しい絵手紙

八女市大島
山下　節子

私が、絵手紙に興味を持ったのは、中学校時代の恩師からいただいた一枚の絵手紙でした。何気なく描かれていた一輪の百合の花にほんとうに感動しました。数十年振りに筆を握り、花、野菜、果物等に向き合うと自然の素晴らしさを強く感じます。ちょっと自信なく知人に出した絵手紙をほめていただくととっても嬉しく、はげみになります。月一回、教室（八女市西公民館）の皆さんと顔を合わせるのも楽しみです。大坪先生の御指導の下、少しでも感性豊かになれればと思い、続けていきたいです。一度教室を覗いてみませんか。

演習林体験実習

八女農業高等学校

黒木町の本校演習林で、１年生全員で間伐や下草刈りを行いました。一昨年７月の九州北部豪雨でマイクロバスが通れなかった道も通れるようになりました。午前中は、ふくおか森林インストラクター会の方から、森林には環境保全・土壌保全・水質浄化などの大切な役割があることをわかりやすく説明していただきました。午後の実習では、女子は、長鎌を使ってシダやいばら等の下草を丁寧に刈っていきました。男子は、チェーンソーや鋸を使って間伐をしました。怪我がないように切り方や間伐方法を八女森林組合の方から教わりながら行いました。同窓会やＰＴＡの方々も多数参加してもらって一緒に山の手入れをすることができました。

間伐の様子

下草刈り

八女農みらい館今月の開館日

４日(火)、７日(金)、14日(金)、18日(火)、21日(金)、25日(火)、28日(金)

毎週火曜日と金曜日の２回販売時間は、10時30分～12時30分です。多くの皆様がお越しいただくことを心よりお待ちしております。

高円宮記念日韓交流基金顕彰について

（横浜市）黒木　久夫

八女市祈祷院出身の私の家族は、兄弟姉妹五人全員、福島高校出身です。末弟の黒木実馬君は防衛大学に進み国防一筋の人生を歩きました。彼は、障害者に対する思い入れが一際強く、十数年前からＮＰＯ法人車椅子ダンス普及会を設立、現在は全国に４００もの支部を有する組織を作り上げました。彼は、防衛大学で戦史の教鞭をとったこともあり誰の紹介も受けず韓国救国の将軍白善燁閣下の門を叩きました。以来、韓国の障害者施設との草の根交流に大いに努力してきました。この長年にわたる日本と韓国との草の根交流に貢献したということでこの度、日韓交流基金で顕彰の対象となり日本韓国の四団体の一つに選ばれました。

12月９日、東京四谷の韓国文化院で第五回高円宮記念日韓交流基金顕彰式典が行われました。私も、活動の初めから参画したというので陪席を許されました。当日は参会者１５０名、高円宮妃のご臨席もあり晴れがましい雰囲気でした。現在日本と韓国の間は、色々な問題があり必ずしも良好な関係とは言えません。しかし、このような時こそ民間レベルでの友好親善が必要です。私は、宮内庁に勤務して天皇陛下が皇太子の時、皇太子侍従を務め、昭和天皇大喪の礼や、天皇即位の礼を務めた私と同期の昭和28年福島高校出身、中島宝城君について高円宮妃殿下にお話ししました。妃殿下も宝城君について大変良くご存じで、喜んでいただきました。車椅子ダンス普及会は、本部を久留米市に置き八女地区でも多くの方々の協力を得ています。今回の受賞を大きな飛躍として関係者一同今後とも努力していく所存です。

詳しい活動は八女支部長　樋口芳子　☎24-5462迄お尋ね下さい。

孫と登った八峰

平成26年は暖かく穏やかな新年を迎えることができた。今回は私の登山を支える愛車スズキ、エスクード（平成6年式）を紹介します。今年で20年間も大きなトラブルもなく、無事故で仲間や孫を運んでくれた、まさに型は古いが雪にも強い頼りになるパートナーです。

さて昨年は孫の啓仁（小1）との登山は８回を数え、誰の手も借りず自分の足で登頂した。楽な草原歩きもあれば、ロープを使ってのガケ登りにも難無くクリアしてゆく。かえって手ごわいルートの方が達成感でいっぱいだ。山に登るのは決して楽ではないけれど山頂に着けば絶景が待っており、爽快さを二人で味わう至福の一時である。

初級の脊振山から中級の宝満山そして上級の久住山へ八峰の累計は8344メートル、これはエベレストに匹敵する。

「じいちゃん、僕が大きくなったら一緒にエベレストに登ろうね」だって。

その時まで元気にしとるじゃろかー。そんな事を夢みる“じい”であった。

八女文化連盟写真部
樋口　清人

呟き　ことばのご馳走

言葉が心を満たす最良のご馳走だと娘が目を輝かせながら語ったことがある。大学卒業後、大手の生保に勤めた娘。新人研修会で学んだ「ことばのご馳走」に感動し母を相手に熱く語ったのは十五年前。

沈黙は金なり、と教えた国である。

米国人と結婚した妹が帰国する度に、日本男児と結婚したことを悔やむと笑った友。冗談の中に本音が見え隠れしていた。「愛してる」から始まる青い目の義弟。日々の生活の中で妻の心に響く優しい言葉掛けがごく自然にできる青い目の義弟は、さしずめ言葉のご馳走名人とでも呼ぶのだろうか。

夫を看取った後、私は死生学の講座に通った。そこで終末期を迎え愛する人とのお別れが近づいた時、家族に思いを言葉で伝える大切さを高木慶子シスターから学んだ。

難病の夫を看護中、夫は毎日感謝と愛に満ちた言葉を私に掛けてくれた。にもかかわらず私は気恥かしくて夫に優しい言葉を掛けられないまま、突然の別れを迎えた。

そのことが今でも心残りだ。

いつの日か私にも必ず訪れる終末期。その時、孫や娘夫婦に私が振る舞う最後のご馳走は、照れることなくありったけの思いを託す言葉のご馳走と決めた。

「あなた達のことをすごく愛しているよ。

おばあちゃんはいつも側に居て守っているからね。そして必ず又会えるからね。

今まで本当にありがとう。」

夏生